

2007 年度卒業論文

イマーム・ハティブ学校の現状

—1997 年の「2 月 28 日過程」とそれをめぐる議論を中心に—

トルコ語専攻 8503166 新井慧

担当教官 林佳世子

イマーム・ハティブ学校の現状

－1997年の「2月28日過程」とそれをめぐる議論を中心に－

目次

| | |
|-----------------------------------|----|
| はじめに | 3 |
| 第1章 イマーム・ハティブ学校の1970年代から1990年代の状況 | |
| 第1節 1970年代の状況 | 5 |
| 第2節 1980年代から1997年まで | 6 |
| 第2章 1997年の教育法改正とその後のイマーム・ハティブ学校 | |
| 第1節 世俗主義勢力の危惧 | 10 |
| 第2節 1997年「2月28日過程」 | 11 |
| 第3節 「2月28日過程」に対する各紙の反応 | 12 |
| 第3章 入試における係数とイマーム・ハティブ学校を取り巻く現状 | |
| 第1節 係数の導入とそのシステム | 14 |
| 第2節 公正発展党の成立と総選挙での勝利 | 16 |
| 第3節 係数に関する法案と差し戻し | 17 |
| 第4節 係数に関する議論への各紙の反応 | 18 |
| 第5節 イマーム・ハティブ高校の現在 | 29 |
| 終わりに | 31 |
| 参考文献 | 33 |

はじめに

世俗主義を国是とするトルコ共和国において、1990年代からイスラム復興勢力の台頭が顕著になった。その象徴が福祉党である。福祉党は1997年に解党されるまで1990年代では94年の地方選挙、96年の総選挙で成功を収め1996年から連立政権を組んでいた。¹2002年の11月に実施された選挙では、その後継政党ともいえる公正発展党が圧倒的勝利を収め、国会で単独過半数の議会を獲得するほどであった。さらに、2007年に行なわれた選挙でも公正発展党は勝利した。²

こうした状況を危惧した世俗主義を擁護する勢力も、90年代後半から様々な対抗策を講じた。この対抗策の一つとして、1997年には新しい教育法が制定され、初等教育が5年から8年へと引き伸ばされ、職業高校の前期の課程が廃止された。これにより、導師・説教師（＝イマーム）を養成する職業学校イマーム・ハティプ学校も中等部が閉鎖されることになった。これは宗教勢力の抑え込みのためではないかと激しい議論が巻き起こっている。³

このようにイマーム・ハティプ学校は、単に導師・説教師を養成する学校というだけでなく、トルコ共和国の政治議論においてもしばしば名前の挙がる学校である。本論文では、イマーム・ハティプ学校が1970年代以降、政治の中でどのように扱われてきたのか、そしてイスラム復興勢力との関係性についても検証してみたい。これを検証することは、現代のトルコ政治における世俗主義とイスラム復興勢力の関係を考察する一助となると考えられるからである。

まず第1章では、2008年現在与党である公正発展党のもとになっている国民救済党が台頭した1970年代から、クーデターのあった1980年代を経て、軍部が当時与党であった福祉党を始めとするイスラム復興勢力を抑え込む目的でおこなった1997年の「2月28日過程」の前までの期間のイマーム・ハティプ学校の歴史についてとりあげる。第2章では、1997年の「2月28日過程」について詳しく取り上げる。「2月28日過程」の原因は何で

¹ 間寧「トルコの民主化・宗教自由化とイスラーム運動の発展」私市正年・栗田禎子編『イスラーム地域の民衆運動と民主化』イスラーム地域研究叢書3、東京大学出版会、2004年p.293.

² 澤江史子『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版、2005年p.234.

³ 新妻幸恵「トルコ共和国におけるイマーム・ハティプ学校の歴史と現状」東京外国語大学外国語学部トルコ語専攻2002年度卒業論文、p.1.

あったのか、そしてこの「過程」により、イマーム・ハティプ学校についてどのような決定が下されたのかを取り上げる。さらに第3章では、高等教育審議会と大学入試の改革案について取り上げる。この法案は、「2月28日過程」の際に導入された大学入試における係数の是正についての法案である。ここではまず係数のシステム自体について検証し、さらに、この法案がどういった経過を辿ったかとその経過に関する当時の新聞記事も検討したいと思う。以上の検証により、イマーム・ハティプ学校と政治のつながりがどのように変化してきたのかを明らかにすることが本稿の目的である。

先行研究では、今日のイマーム・ハティプ学校について扱ったものは非常に少ないが、その中で2005年に出版されたMehmet Ali Gökaçtıによる『トルコにおける宗教教育とイマーム・ハティプ (Türkiye’de Din Eğitimi ve İmam Hatipleri)』、特にその第3～4章、トルコ共和国建国以降の部分を参考にした。⁴また政治との関係については、イスラム政党の変遷もまとめられている、澤江史子の『現代トルコの民主政治とイスラーム』、トルコにおける宗教政策とイスラーム運動に関しては間寧の「トルコの民主化・宗教自由化とイスラーム運動の発展」を参考にした。これらの研究に加えて、特に係数問題に関しては、当時の新聞のコラムを取り上げ、当時の識者たちはどのように係数の問題について考えていたのかを検証していく。

⁴ Mehmet Ali Gökaçtı, *Türkiye’de Din Eğitimi ve İmam Hatipleri*. İletişim Yayıncılık A.Ş., İstanbul, 2005 (以下Gökaçtıと略する。)

第1章 イマーム・ハティプ学校の1970年代から1990年代の状況

第1節 1970年代の状況

1970年ごろのトルコでは、10%台で推移するインフレと失業者の増大など経済状況の悪化によって、労働運動や学生運動が活発化・過激化していた。これに対する右翼団体の先鋭化により、左右両派の武力闘争や衝突が数多く見られるようになった。この衝突による混乱を憂慮した軍部は、大統領および上下議院議長に対して書簡を提出した。この書簡の提出によって、デミレル内閣は総辞職した。この事実上のクーデターをへて、1971年3月12日にニハト・エリム内閣が組閣された。⁵

エリム内閣になると、当時、学校数と学生数が増加し始めていたイマーム・ハティプ学校に対して政策がとられた。1971年8月4日に国民教育委員会（Milli Talim ve Terbiye Kurulu）の決定で、それまで7年制の教育機関であったイマーム・ハティプ学校の最初の3年間にあたる中等部が閉鎖され、4年制の職業高校になった。これにより、イマーム・ハティプ高校への入学者は35%も減少した。⁶

しかし、イマーム・ハティプ学校の中等部閉鎖も、長くは続かなかった。1972年には選挙が行なわれ、ネジメッティン・エルバカンをリーダーとする国民救済党が48議席を獲得した。ネジメッティン・エルバカンは、1969年の総選挙に無所属で出馬し、イスラム保守派の拠点であるコンヤで当選した。彼は、イスラム色の強いアラビア語を党綱領に用いるなどイスラム的価値に重点を置いていた。⁷1974年に国民救済党は共和人民党との連立内閣を組閣した。

国民救済党が与党となると、1974年の8月に、国民教育委員会から県知事への文書で1974年の学業の年度が始まるまでにイマーム・ハティプ学校の中等部の再開が通達された。こうして、1974年には29校で中等部が再開された。この中等部では、一般科目にくわえて、週6時間のコーランとアラビア語の授業、2時間の宗教科目が行なわれた。⁸

この連立内閣は、1974年9月に瓦解したが、後の連立内閣にも国民救済党は入った。1970年代の後半になるとイマーム・ハティプ学校の数も増加した。1975年には70校、

⁵ 新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001年 p.270-271.

⁶ Gökçağı, pp.216-218.

⁷ 新井、前掲書、 p.268.

⁸ Gökçağı, p.222.

1976年には77校、1977年には86校と増加し300校を超えた。学生数も1974年には10,785人だったのが1978年には108,345人へと増加した。⁹ただし、校舎は民間人の出資によって作られ、教師数は不十分であった。また校長のいない学校もあったという。

1973年の石油ショックとその直後のキプロス紛争での出費、その後の武器禁輸の制裁により貿易収支は悪化した。これを是正するためにとった政府の策はうまく機能せず、その結果、インフレ率は急上昇し1979年末には100%という経済危機に陥った。この危機により労働運動が活発化し学生運動が高まり、左派右派の対立といった混乱が顕著になっていった。イマーム・ハティプ学校でも次のような流れがあった。Gökaçtıによれば、国民救済党の片腕として組織された「急襲者 (akıncılar)」がイマーム・ハティプ学校で影響力と活動を保障するための運動を展開し、後にこれは武力衝突に変わっていったという。¹⁰また、イマーム・ハティプ学校でもボイコットを筆頭に様々な活動が繰り広げられた。東アナトリアや内陸アナトリアのいくつかの都市ではイマーム・ハティプ出身者も「急襲者」のグループを形成した。また、ヌルジュやナクシベンディーと言った教団もイマーム・ハティプ学校で活動を始めた。

このように、この時代におけるイマーム・ハティプ学校の急激な増加とイマーム・ハティプ学校内における政治的な活動によって、その後のイスラム復興勢力の台頭の基盤が作られたと言えるだろう。

第2節 1980年代から1997年まで

1970年代後半から、労働運動から左派右派の対立が激化した。また、国民救済党の世俗主義の原理を誹謗する態度があからさまになった。¹¹このような国内の混乱や破壊活動と分離主義運動の横行といった無政府状態を解消するために1980年9月12日未明に軍によるクーデターが起こった。

クーデター後の軍政下で、軍部はトルコ・イスラーム統合論を国家イデオロギーとして採用したといわれる。これは、ウンマの概念とトルコ民族主義を融合した思想である。軍

⁹ Ibid., p.223.

¹⁰ Ibid., p.224.

¹¹ 1980年の9月6日にはエルバカン選挙区のコンヤで大規模な集会を開いた。参加者は国家の斉唱の拒否やトルコ帽をかぶりイスラム法の復活を唱える行進をした、という。新井、前掲書、p.281.

部の目的は、最も恐れていた共産主義に対抗する価値としてイスラム的価値観を普及させることであった。¹²

イスラム的価値の普及のために採られた政策は二つあった。一つ目は、今まで選択科目であった宗教科目が必須化されたことである。二つ目は、1983年に教育基本法を改正し、イマーム・ハティプ学校の卒業生が全ての高等教育機関に進学できるようにしたことである。これは、1970年代の後半に混乱の原因となった様々な思想対立を緩和するための一つの緩衝材として宗教を用いたものであった。こうした中でイマーム・ハティプ学校の数は、さらに増加した。クーデター直後374校だったイマーム・ハティプ学校は、クーデター後の軍政で国家元首となっていたエヴレンの時代には、2校増加し376校になり、学生数は79,249人となった。その内訳は、男子が66,562人、女子が12,687人である。¹³

1983年には民政移管のために総選挙がおこなわれた。この総選挙で勝利したのがトゥルグット・オザル率いる祖国党である。この時期から、イスラム復興を支持する勢力の経済力の向上と高学歴化が進んだ。その理由としては、オザルがとった経済開放政策の影響でイスラム銀行が設立されてから湾岸諸国からのオイルマネーが流入したことや、欧州のトルコ移民の敬虔なムスリム層からの送金によりイスラム勢力の経済力が向上したことがあげられる。¹⁴1990年代になると、こうして経済力をつけて台頭しはじめたイスラム勢力から政治的な要求も強くなってくる。彼らが要求したのは宗教教育と彼らの価値観を後の世代に受け継がせるためのメカニズムを作ることであった。¹⁵

このような状況を反映し、オザルの首相時代にはイマーム・ハティプ学校は9校増加する。さらに後のメスット・ユルマズ首相時代、スレイマン・デミレルとイノニユによる連立政権の時代になると急速に増加した。1990年から1992年には23校、1992年から1994年には12校増加し、その後95年には総計で500校を超えた。¹⁶校数の増加に伴い、生徒数も右肩上がりに増加している。1981年 - 1982年には、62,206人であった生徒数も、1982年 - 1983年には72,793人、1984年 - 1985年には83,157人、1989年 - 1990年には、92,585人、1990年 - 1991年には、100,687人かついに10万人を超え、1994年 - 1995

¹² 間、前掲論文、p.288

¹³ Gökaçtı, p.233.

¹⁴ 澤江、前掲書、p.109.

¹⁵ Gökaçtı, pp.235-236.

¹⁶ Ibid., pp.236-237.

年には 166,831 人と 2 年に 1 万人のペースで増えているのである。¹⁷

またこの時代になると、新たな形のイマーム・ハティプ学校が開校され始めた。これがアナトリア・イマーム・ハティプ高校である。イマーム・ハティプ高校は、英語などを教授言語として外国語教育を重視するアナトリア高校という位置づけで開かれた。¹⁸アナトリア・イマーム・ハティプ高校では、1980 年代以降、時代の変化に合わせた教育が行われた。すなわち、外国語で教育が行われ、コンピューター教室やスポーツ施設といった近代的な教育施設が整えられた。これは、宗教的な価値観あるいは倫理観を身につけると同時に、外国語、コンピューターといった現代に必要な知識も身につけて欲しいという宗教保守層の保護者のニーズに合わせた学校ともいえる。

1985 年に最初のアナトリア・イマーム・ハティプ高校がイスタンブルのベイコズで開校した。この学校は、既存のイマーム・ハティプ高校とはまったく独立した学校である。ドイツのトルコ人労働者の子供たちのために開かれた学校で、教育もドイツ語で行なわれている。さらに、この学校の支部として英語で教育を行なう学校も 1989 年に開校した。¹⁹

1993 年にはブルサ、ギュンギョレン（イスタンブル）、ウスパルタ、コンヤでもアナトリア・イマーム・ハティプ高校が開校した。これらの学校は、当初は既存のイマーム・ハティプ高校の管理下にあったが、後に独立した。同年にはイスタンブルのイチェルベイコズでオランダのトルコ人労働者の子供たちのためのアナトリア・イマーム・ハティプ高校が開かれている。1993 年の時点でアナトリア・イマーム・ハティプ高校は 7 校あり、従来のイマーム・ハティプ高校式のカリキュラムを採用しているクラスは 114 クラス、外国語重視のクラスは 2 クラスであった。まだまだ新しい試みの段階であり、従来のイマーム・ハティプ高校のカリキュラムのクラスが大部分を占めている。

このように、1980 年代後半から 1990 年代前半は特にイマーム・ハティプ学校の校数、生徒数ともに爆発的に増えた時期であった。

一方で、政治に目を移してみると、ここでもイスラム復興勢力の台頭が見られるようになる。1980 年のクーデターで世俗主義に反するという理由で解党された国民救済党の後継政党である福祉党の台頭である。福祉党は 1991 年の総選挙において得票率 10.9%をしめ、始めて国会での議席を獲得した。さらに、1994 年の地方統一選挙では、首位を得票率 21.0%

¹⁷ 新妻、前掲論文、p.16

¹⁸ Gökaçtı, p237.

¹⁹ Ibid., pp237-238

の祖国党に譲ったものの、得票率 19%でさらに最大都市イスタンブルと首都アンカラを含む 28 の県庁所在地の市長職を手に入れた。1995 年の選挙では 21.4%の得票率で 1 位となり、1996 年には第 2 党の中道右派の正道党と連立ではありながら政権に就くことになった。その結果、トルコで初のイスラム政権が誕生した。²⁰

以上のように、80 年代、90 年代には、1970 年代に作られた基盤の上にイマーム・ハティプ高校の数に更なる増加が見られ、新たな形のイマーム・ハティプ高校が開校されるなど、イマーム・ハティプ高校は校数、学生数の面でも過去最大の規模となった。また、1983 年以降の職業高校の卒業生の大学進学の許可によるイマーム・ハティプ高校の卒業生の多方面での活躍が見られるようになった。さらに、1980 年代からイスラム復興勢力の経済力も向上した。こうした状況で福祉党は台頭し、イスラム復興運動は大きな勢力を形成した。イマーム・ハティプ学校は、イスラム復興運動の盛り上がりを象徴する存在となった。

²⁰ 問、前掲論文、pp.293-294

第2章 1997年の教育法改正とその後のイマーム・ハティプ学校

第1節 世俗主義勢力の危惧

前章で取り上げたように、1980年代の後半からイスラム勢力は着実に力を伸ばし、1996年には組閣をするまでになった。こうしたイスラム復興勢力の台頭にたいして世俗派の危機感が高まってきていた。危機感の矛先のひとつは、イマーム・ハティプ高校に向けられた。なぜなら、1983年以後イマーム・ハティプ高校を始めとする職業高校の卒業生も希望の学部に進学できるようになっていたからである。²¹イマーム・ハティプ学校の普通授業のカリキュラムは一般の普通高校と同じに行なわれ、その水準は一部のエリート校を除く普通高校より高かった。このため、有力大学にはイマーム・ハティプ高校出身者が多く入学するようになっていた。高卒者のイマーム・ハティプ高校出身者の占める割合は80年代以降急増し、90年代前半には高卒者の1割を占めるようになった。このようにイスラム勢力の次代を担う世代を輩出していたイマーム・ハティプ高校は、世俗派の議論の対象となっていくた。ここでは、イマーム・ハティプ高校に関するいくつかの議論を取り上げたいと思う。

イマーム・ハティプ高校の現状について初めて深刻な議論がなされたのは、1989年にトルコ実業者協会（TÜSİAD）によって刊行された『トルコにおける教育（Türkiye’de Eğitim）』という題名のレポートによってであるという。このレポートでは、数的データにもとづき、イマーム・ハティプ学校の普及と学生数の増加について検討している。結論としては、世俗派の観点からこの学校数と生徒数の急増に対して警鐘を鳴らし、イマーム・ハティプ学校が職業高校としての地位を逸脱しないことと宗教職の雇用にあわせた生徒数の制限を訴えている。²²

1990年には、トルコ雇用主組合連合会（Türkiye İşveren Sedikaları Konfederasyonu, TİSK）からのレポートが発表されている。前述のTÜSİADのレポートと同じように生徒数の増加が他の職業高校と比べて7～8倍であることを取り上げ、この学校の本来の目的からの逸脱を指摘している。同年にイスタンブル商工会議所（İstanbul Ticaret Odası, İTO）の「トルコにおける職業教育（Türkiye’de mesleki eğitim）」というレポートにおいても、

²¹ 同論文、p.289.

²² Baloğlu Zekai, *Türkiye’de Eğitim*. TÜSİAD, İstanbul, 1990, p.131. Gökaçtı, p.239.より引用。

ここ 20 年以内で最も生徒数の増加した教育機関としてイマーム・ハティプ高校が取り上げられている。²³

また 1989 年の 1 月 9 日付の Cumhuriyet 紙においても同様の議論が展開されている。同紙によれば、1972 年まで校数 72 校、学生数 10,845 人であったイマーム・ハティプ学校が、1988 年には校数 383 校、290,000 近くの生徒数を抱えるほど巨大化している。さらに、1987 年 - 1988 年の教育年度のアンカラ大学の政治学部行政学科の学生数の 40% がイマーム・ハティプ高校出身者であること、一方でアンカラ大学神学部の生徒の 1.5% がイマーム・ハティプ高校出身者であることを述べている。これは、イマーム・ハティプ高校の卒業生が宗教職務に就くのではなく官僚になっており、イマーム・ハティプ学校創設の本来目的から逸脱した状態である。さらに政府のなかにイマーム・ハティプ学校出身の官僚が増えることにより、政治化したイスラムが軌道に乗り、共和国の根幹である世俗主義の概念が覆されるのではないかということを描いている。²⁴

こうした状況の中で 1997 年軍部が月例の国家安全保障会議で世俗主義の遵守、徹底を訴えたのである。これがいわゆる「2 月 28 日過程」である。次節ではこの「2 月 28 日過程」について取り上げたいと思う。

第 2 節 1997 年「2 月 28 日過程」

前節で取り上げたように、イスラム勢力の台頭によって世俗主義を支持する人々の間では警戒の声が高まっていた。「2 月 28 日過程」の直前、軍部とイスラム勢力である与党の福祉党との緊張関係は高まっていた。1996 年のラマザン（断食）月に、エルバカンが法律上禁止されている教団のシャイフを首相官邸に呼び、ラマザン明けの食事（イフタール）に招待した。また、ラマザン明けのシェケルバイラムという祝日に、アンカラ・スィンジャンの福祉党から選出された市長が、イラン大使を招きパレスチナ問題に関して公然とイスラエルを非難した。これに対して、軍部はスィンジャンに戦車を送り込み、検察当局はスィンジャン市長を逮捕した。²⁵さらに、1997 年の 1 月の月例の国家安全保障会議では、反動勢力、つまり、イスラム勢力が最も大きな危険として、分離主義運動よりも上に位置

²³ Gökaçtı, p.239.

²⁴ Gencay Şeylan, “İmam Hatipliler Geliyor,” Cumhuriyet, 9 Ocak 1989. Gökaçtı, p.242. より引用。

²⁵ 澤江、前掲書、pp.172-173.

付けられたのである。²⁶

こうした状況の中で、2月28日に行なわれた国家安全保障会議で、伸張するイスラム勢力に対してさらに深い議論が繰り広げられた。ここでは、「憲法とアタテュルクの理念によって規定された民主的で世俗的、かつ法治国家であるトルコ共和国に対して活動する反体制的な活動」について議題されたという。こうした活動をするものを危険分子と位置づけ、法的・行政的措置によってこの活動を妨げるために、国家による宗教の管理の体制をもう一度引き締めることが必要だとされた。この議決の中でイマーム・ハティプ学校についても言及された。以下に、イマーム・ハティプ学校と関わりのある部分だけを抜き出して取り上げたい。²⁷

- ・教団とかかわりのある私設の学生寮、ワクフ、学校は国家の担当部局の監督下に置かれ、教育統一法の規定に従って国民教育省の管轄下に置かれなければならない。

- ・若者に共和制、アタテュルク、祖国、国民への愛をはぐくみ、トルコ国民を近代文明のレベルに押し上げるために、

- (1) 8年間一貫の義務教育を導入し、

- (2) 義務教育終了後の子供は家族の要望に応じて教育相管轄下のコーラン教室で学ぶことができる。

- ・共和制とアタテュルクの原則と改革に適合した宗教知識人を育成するために、教育統一法に沿った教育がされるべきである。

- ・大学や政府の各省庁に反動主義者が浸透してきている。政府はこの傾向を食い止めなければならない。

以上のような決議を受けて、1997年8月16日に法令4306号として義務教育の8年間への延長が法制化された。これに伴い、イマーム・ハティプ学校を始めとする職業学校の前期課程も廃止されることとなった。

第3節 「2月28日過程」に対する各紙の反応

こうした一連の流れに対して、各紙の反応を取り上げてみたい。1997年3月25日の

²⁶ Gökçağı, p.243.

²⁷ 議決の要旨は、澤江、前掲書、pp.301-302.

Milliyet紙のAbbas Güçlüは、コラムで、この会議で出された決議によると、8年一貫の義務教育の目的はイマーム・ハティプ学校の閉鎖ではなく、新たな構造化であると述べている。同年7月27日のHürriyet紙のOktay Ekşiは、この決議がイマーム・ハティプ学校に対する反対ではなく、イマーム・ハティプ学校に対して秩序をもたらすためのものであったとし、この秩序がもたらされなかったならば、反体制的な学校になってしまうだろうと主張している。また8月5日のCumhuriyet紙では、Mümtaz Oktayが、1970年代に開校されたイマーム・ハティプ学校が法律によって閉鎖されたが、これは法律的には問題なかったとの見解を示した。²⁸

一方、1997年の3月29日のYeni Şafak紙でAhmet Taşgetirenは、この決議はイマーム・ハティプ学校と軍の対立構造を作るためのものだと述べ、9月26日の同紙でFehmi Kuruは、イマーム・ハティプ学校が独自の構造を持っていて、西洋での教団に属する宗教組織のトルコ版であり、この独自の組織がこの「過程」によって崩され、機能を失ってしまうだろうと述べている。²⁹

このように、この「2月28日過程」とその後の義務教育の8年間への延長の法制化は、体制派とイスラム派の新聞によってまったく異なった評価がされているのである。

²⁸ Gökaçtı, pp.244-245.より引用。

²⁹ Ibid., pp.244-245.より引用。

第3章 入試における係数とイマーム・ハティプ学校を取り巻く現状

第1節 係数の導入とそのシステム

この節では、「2月28日過程」により導入された諸政策のうち、大学入試における係数問題についてみていこう。この係数問題は、イマーム・ハティプ高校の生徒の進路を限定する意図があるのではないかという点において、義務教育8年間への延長とならんで大きな議論を引き起こしている。

前節の「2月28日過程」の延長上で、高等教育審議会の決定で、大学入試の際に学生がとった得点を調整するための係数システムを導入することによって、学生を特定の分野の大学を割り振るということが1998 - 1998 教育年度から始められたのである。³⁰これにより、イマーム・ハティプ高校卒業生の進路の限定が意図された。

トルコの大学入試の得点は、高校時代の成績に係数をかけた点数と全国共通の試験の得点を足して算出される。そして、その得点と受験生の希望をもとに大学入試センターが最終的に受験生の進路を決定する。³¹高校時代の成績、すなわち内申点は、受験生が所属する高校の全受験者の共通試験での成績によって変わってくる。そして、学校全体の成績がよければよいほど最高点と最低点の幅が狭まる。例えば、A校とB校という2つの学校があるとする。A校の入試における受験者全員の平均点が95点、B校の平均点が75点だったとする。この場合、A校の内申点は100点から90点になる。一方、B校の内申点は100点から50点までの間になる。これにより、A校では、最下位であっても90点以上の内申点がつくのである。このように、共通試験の結果により学校の順位をつけて生徒の内申点が全国でどの位置にいるのかを相対化しているのである。

次に係数について取り上げたい。係数の決定は高校時代の所属と希望する進路によって決まる。普通科高校の場合は社会科学コース、自然科学コース、トルコ語・数学コース、外国語コースに分かれる。そして、大学の学部も、この高校でのコースに対応している。高校のコースと大学の学部を対応させると、社会学コースが文系学部、自然科学コースが理系学部、トルコ語・数学コースが理系と文系の比重が等しい文理系学部、外国語コース

³⁰ 宮崎元裕「トルコの大学入試における高大接続 - 高校教育の多様性を考慮した画一的な大学入試 -」『比較教育学研究 31』東信堂、2005年 pp.193-221.

³¹ (受験生の点数) = (共通試験の点数) + (内申点 × 係数)

が外国語学部と対応する。ここで、イスタンブール大学を例にとってみたい。³²文系学部にあたるのは、教育学部の諸学科（トルコ語教員養成学科、社会科学教員養成学科）、文学部の諸学科（トルコ語文学科、地理学科、歴史学科、芸術史科、考古学科）、と神学部である。理系コースに当たるのは、医学部、薬学部、工学部、理学部と教育学部の諸学科（自然科学教員、数学教員養成学科）である。文理系学部にあたるのは、文学部の諸学科（心理学科、社会学科、哲学科、人類学科）、法学部、経済学部、政治学部である。文系の学部として分類されるが統計などといった数学的な要素を扱う学部が文理系学部に当てられている。このため、高校のトルコ語・数学コースが対応していると考えられる。最後に外国語学科は、教育学部の諸学科（外国語の教員養成の学科）や文学部の諸学科（外国語・外国文学科）である。

普通高校の卒業生が、対応する学部に進学を希望する場合には、内申点に 0.8 という係数をかける。そうでない場合は、0.3 をかける。一方、職業高校の場合は、職業コースに対応した学部に進学を希望する生徒には内申点に 1.04 をかけ、希望しない生徒の内申点には 0.3 をかける。

例えば、高校時代に普通高校で社会科学コースの生徒がいたとする。その生徒が文学部の歴史学科に進みたい場合は、高校時代の社会科学コースと希望の学部である文系の文学部（歴史学科）が一致しているのでその生徒の内申点に係数 0.8 を掛ける。もし進学希望先が高校時代のコースである社会学コースとは別の理系に属する理学部であった場合は、内申点に適用される係数は 0.3 となる。³³

ここで、イマーム・ハティプ学校について考えてみると、イマーム・ハティプ高校の職業コースに対応する学部は神学部と教育学部の宗教科目教員養成学科の二つである。この学部に進学する場合は、非常に有利になる。というのは、これらのコースは、イマーム・ハティプ高校のコースと対応する学部なので内申点に 1.04 の係数が掛けられた得点になるのである。しかし、これらの学部の定員はイマーム・ハティプ学校の規模や全体の生徒数に比べてかなり少ないので合格するのは非常に難しい。そこで他の学部を選択するならば、高校時代のコースと希望の学部が別の系統になり、係数 0.3 が内申点にかかるので非常に不利になってしまう。イマーム・ハティプ学校卒業生の大学進学率はかなり下がって

³² 宮崎、前掲論文、p.198 表 2 より。

³³ 前者の場合のその生徒の得点は、(得点) = (共通試験の得点) + (内申点×0.8)
後者の場合はその生徒の得点は、(得点) = (共通試験の得点) + (内申点×0.3)

しまっているのである。特に、神学部と教育学部の宗教教員養成学科以外の学部に進学するのは不可能に近い。このようにして、以前のように様々な学部に進学するという卒業後の進路は絶たれてしまったのである。³⁴

第2節 公正発展党の成立と総選挙での勝利

この係数におけるイマーム・ハティブ高校の不利を是正しようと法案を提出したのが現在もトルコ共和国の与党である公正発展党であった。ここで公正発展党について少し取り上げたい。

これまで取り上げたように、「2月28日過程」ではイスラム勢力に対する抑えこみが主目的であった。特にそのイスラム勢力の最も代表的な存在であった福祉党に対して、共和国検事総長は、福祉党が世俗主義に違反しているという理由で、福祉党の非合法化を要求する訴えを起こした。こうした動きにあわせて、福祉党と連立を組んでいた正道党の議員達が連立政権に異を唱え、次々に離党し始めたので、6月末には連立内閣が崩壊した。³⁵ さらに、1998年の1月には検察の求めていた解党措置を憲法裁判所が認め、福祉党は解党され、エルバカンら5人の議員は5年間の政治活動禁止を命じられたのである。この事態に備えていた福祉党は、解党命令の前から後継政党として美德党を結党していた。しかし美德党についても検察は解党を求め、憲法裁判所はこの要求に応じる形で、2001年6月に解党命令を下した。³⁶

この福祉党の解党から美德党結成と解党までの間で、党の要職をめぐる古参幹部と若手幹部の対立がおこった。ここで若手幹部として台頭してきたのが、レジェップ・タイイプエルドアンやアブドゥラー・ギェルであった。2000年党大会において、若手幹部側は党首候補としてギェルを擁立し、古参幹部は現党首のクタンを擁立した。クタン圧勝という大方の予想を裏切り、クタンは僅差で勝利した。³⁷これは、党内でもギェルを始めとする若手幹部の支持層は着実に増えていたことを意味している。2001年の6月に美德党の解党命令が下されると、美德党は若手幹部と古参幹部の二つの派に分裂した。若手幹部は公正

³⁴ 神学部と宗教科目教員養成学科を選択した場合、
(得点) = (共通試験の得点) + (内申点×1.04)

他の学部を選択した場合、
(得点) = (共通試験の得点) + (内申点×0.3)

³⁵ 澤江、前掲書、p.173.

³⁶ 間、前掲論文、p.296.

³⁷ 澤江、前掲書、pp.184-187.

発展党を、古参幹部は至福党を結成した。

こうして迎えた 2002 年 11 月の総選挙では、公正発展党は 81 県中 70 県で 1 位となり、全国平均で 34.3% の得票率であった。次に議席を獲得できたのは 19.4% の得票率の共和人民党で、10% の足切り条項のため議席を獲得することができたのはこの 2 党のみであった。このため、公正発展党は 66% の議席を占め単独政権を樹立した。³⁸ 一方、古参幹部たちが結成した至福党は、得票率 2.5% と落ち込み、10% の足切り条項により議席を獲得することができなかった。こうして、美德党の解党後は、古参幹部と若手幹部の明暗ははっきりしたのである。

第 3 節 係数に関する法案と差し戻し

公正発展党が単独で政権をとると、最初に取り組んだ課題のひとつが高等教育審議会の改革であった。1 節で見たように大学入学試験において、イマーム・ハティブを始めとする職業高校に対して 1998 年度の大学入試から係数の導入を始めたのは、高等教育審議会であった。公正発展党政権は、この制度の改革に着手したのである。³⁹ この制度を撤廃して、職業高校の出身者が試験の成績に応じて志望の学部にいけるようにすることを目的としていた。この法案は、2003 年に大国民議会に提出されるはずであったが、世俗派の強硬な反対により延期された。しかし、2004 年に 5 月 13 日には、議会に提出され、承認された。

ここで、この法案についてみてみたい。法案によると、まず、普通高校と職業高校ともに文系、理系、文理系の 3 コースに分ける。そして各コースと志望学部によって係数を適用する。文系、理系、文理系コース全てで、そのコースに準じた学部を選択した場合、係数 0.8 が適用される（現行は、普通高校が 0.8、職業高校が 1.04）。そして、文系コースの学生が文理系の学部を希望した場合 0.6（現行は 0.3）が、理系の学部を希望した場合 0.45（現行は 0.3）が適用される。理系コースの学生が文理系の学部を希望した場合 0.6（現行は 0.3）が、文系の学部を希望した場合 0.45（現行は 0.3）が適用される。文理系コースの学生の場合少し特殊である。文理系コースの学生が文系の学部を希望した場合 0.45 が適用され、理系の学部を希望した場合 0.6 が適用される（現行は 0.3）。⁴⁰

³⁸ 同書、pp.234-236.

³⁹ 同書、pp.245-249.

⁴⁰ “Katsayıda eşitlik çıktı.,” Yeni Şafak (2004 年 5 月 13 日)

これに対して、また世俗主義勢力の反対が噴出した。同年 5 月 6 日には、軍参謀本部が、イマーム・ハティプ高校出身者の大学進学の可能性を広げる法改正は、世俗主義の原則に反するという声明を発表した。さらに、全国の 12 の大学の学長を筆頭に 3000 人の教員がデモを行なった。⁴¹

こうした流れの中、5 月 28 日にセゼル大統領は、高等教育審議会の改組や入試改革の法案を議会に差し戻し、再審議を要求した。⁴²差し戻しの理由は以下の通りであった。

- ・ 一方で理性と科学に基づいた教育、他方で宗教的教義に基づいた教育は、社会の二分化を促し、混乱を引き起こす。これが近代化の目的と国民の統一を阻害することは明白である。
- ・ イマーム・ハティプ高校は、宗教者の需要に応えるために設置されたものであり、校数、生徒数は需要の程度に合わせて規制されることが教育の統一と世俗主義の原則に照らして適当である。
- ・ 同校の卒業生が普通高校の卒業生と同様に高等教育の利益を受けることは教育の世俗化を目的とする教育の統一の原則や世俗主義の原則、民主的・世俗的・平等主義的・公正・機能的かつ科学的基盤に立脚した教育の理解すなわち、憲法におけるアタテュルクの原則と改革の基礎を成す精神に反している。⁴³

これに対してエルドアン政権は、同年の議会でこの法案の再審議を見送り、翌年度の再審議を経て、法案の成立を目指すという方針をとった。

第 4 節 係数に関する議論への各紙の反応

本節では、この係数の議論についての各新聞の反応を取り上げたい。2004 年 5 月から 6 月ごろに大学入試における係数を是正すること含めた高等教育審議会改革案についての議論を、世俗派の新聞である Hürriyet 紙とイスラム派の Yeni Şafak 紙から選んで紹介する。

まず、Hürriyet 紙の İlter Türkmen は、5 月 21 日「トルコにおける教育のジレンマ

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/13/p01.html> (2008 年 1 月 7 日閲覧)

⁴¹ 澤江、前掲書、p.245.

⁴² トルコでは、議会において承認された法案は、大統領の承認を受けて初めて有効となる。

⁴³ 澤江、前掲書、pp.246-247.

(Türkiye’de eğitim açmazı)」で、以下のように述べている。⁴⁴

イマーム・ハティプ高校の増加は、直接的に大衆化政策の結果である。イマーム・ハティプ高校がどの時代の、どの政権で開かれたのかということがこれを明確に示している。記録は、332校でデミレル政権である。エジェヴィット政権では33校開校された。1980年の9月14日政府もイマーム・ハティプ高校を新たに開校したというのは正しくない。反対に9月14日政府は、1980年に開校された34校のイマーム・ハティプ高校とイスラム研究所を1つ閉鎖し、イマーム・ハティプ高校の学生数を5万人で凍結した。この天井に敬意を示していたら、現在の諸問題に遭遇しなかっただろう。残念なことに学生数は、1984年以降すぐに15万人を超えた。

問題の別の側面は、イマーム・ハティプ高校がもはや職業高校としての性質をほとんど完全に失っていることである。女性はイマームとハティプになれないにもかかわらず、この高校で学ぶことができる。イマーム・ハティプ高校は、普通高校とほとんど同じカリキュラムを行い、宗教科目を補講として教える学校に変わった。

実のところ、イマーム・ハティプ高校は、ヨーロッパの宗教学校に似た立場にある。しかし、ヨーロッパの宗教教育学校は教会によって管轄されているのに対し、トルコは政府によって管轄されている。世俗主義とまったく相容れない状態である。²² ほどは財団によって運営される、カリキュラムは明確ではないが補講は実際にイマーム・ハティプ高校に似ている高校があり、これらの高校は係数の制限を受けない。

他の職業高校もイマーム・ハティプ高校と同じように係数によるハンディを背負っていることも議論されなければならない。ある意見では、係数による区別は、職業高校への希望を減少させ、学生たちの熱意を壊した。別の意見では、職業高校は特権がある。なぜなら、職業高校の卒業生は、その分野の職業高等専門学校に無試験で入ることができ、その学校を卒業後、その分野の大学に編入できる。しかし、職業高校にとっては、深刻な問題である。

⁴⁴ İlter Türkmen, “Türkiye’de eğitim açmazı,” *Hürriyet* (2004年5月22日)
<http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=227487> (2007年12月26日閲覧)

トルコでは、高校生の 35%が職業高校で、他は普通高校で学んでいる。しかし、先進国ではこの割合が反対にならなければならない。割合が変化すればするほど、大学へは入りやすくなる。高等教育審議会改革案での論争はさておき、この法律が既成事実として大国民議会を通過したことは矛盾している。トルコをたくさんの難題が待ち構えている中、多方面で緊張を生み出すことは全ての観点から有害である。

以上のように İlter Türkmen は、イマーム・ハティプ高校の需要を超える人数の多さとイマームやハティプになれない女生徒の存在を指摘し、イマーム・ハティプ高校が職業高校としての性質を失っており、人数を制限するべきであったとしている。さらに、現在のよようなイマーム・ハティプ高校では、世俗主義に反していると主張している。また、この時期に法案を出すことは多方面で緊張関係を生み出すことにもつながるので有害であるとして、この法案の提出に対しても否定的な見解を示している。

また、同紙のコラムニスト Cüneyt Ülsever は 6 月 3 日の「トルコは将来を見誤った (Türkiye geleceğini ıskalıyor)」で、以下のように述べている。⁴⁵

この国の根幹をなすのは労働者、小さな会社の社長と商工業者である。国を発展させるために最も重要な人的資源は職業高校から得られる。実際のところ職業高校卒業生を失望させた大統領も同じ意見であり、差し戻しの文書では以下のように書かれている。

先進国では、中等教育の中で職業技術中等教育機関の割合が 65%、高校の割合が 35%である。一方、わが国はこれと反対である。しかし職業技術教育は、産業・商業部門のきわめて重要な点である。これほど職業技術教育の割合と数が少ないと、トルコの産業発展は難しい。先進国の産業と競い合えるレベルになる唯一の道は質の高い労働力をたくさん養うことだと当然受け入れるべきである。

この問題に関しては、大統領が差し戻した『係数の廃止を』の第 5 条の理由を国民教育相も次の形で述べている。1998 - 1999 教育年度で中等教育の合計 2,296,203 人の学生の 57%は普通中等教育で、43%は職業技術中等教育に進学し

⁴⁵ Cüneyt Ülsever, “Türkiye geleceğini ıskalıyor.” Hürriyet (2004 年 6 月 3 日)
<http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=230665> (2007 年 12 月 26 日閲覧)

ている。2003－2004 教育年度の合計 3,593,404 人の学生のうち 69%が普通中等教育、31%が職業技術中等教育を選択している。この状況は、イマーム・ハティプ高校に入学する学生の割合が変わらないことを示していて、係数システムの導入がイマーム・ハティプ高校の学生数だけを減少させ、他の職業技術高校は影響を受けていないという意見が正しくないことを証明している。1998 - 1999 教育年度で普通高等教育において 1,297,514 人の学生がであったのに対し、90%増加した 2003－2004 教育年度ではこの数が 2,463,923 人である。職業技術中等教育はというと、1998 - 1999 教育年度には 998,689 人であった学生数は 13%増加して 2003－2004 教育年度では 1,129,481 人である。

以上のように、Cüneyt Ülsever は、トルコにおける職業高校出身者の割合が先進国に比べて少ないことを指摘しているが、イマーム・ハティプ高校だけがこの係数のシステムによって被害を受けたのではなく、職業高校全体が悪い影響を受けたと主張している。

同氏は、6 月 21 日のコラム「イマーム・ハティプ学校の出身者とエルバカン (“İmam hatipliler ve Erbakan”）」という題名のコラムでは、以下のように述べている。⁴⁶

高等教育審議会改革法案を議論するときは以下の 3 点を私は主張した。

1) イマーム・ハティプ学校は、イマームとハティプを養成する職業高校ではなく、憲法 (24 条) が認めている形で、『宗教に特化した教育の要求』をしている人々に仕える機関になっている。

2) イマーム・ハティプ学校だけを押しさえ込むために、国の根幹を担う人材を育てる職業高校の中等部が廃止され、8 年間への義務教育延長したことによって、もはや職業のエキスパートを育てられない。

3) 一種の基準を測るテストであり、もともと普通高校のカリキュラムに合わせて用意された大学入試 (ÖSS) で職業高校のために係数を適用することは不合理である。TÖSEV の調査では、イマーム・ハティプ高校の生徒が ÖSS で、自分の分野以外の大学にはあまり受からなかったという結果が出ている。

政府が方向転換したとしても私はこの意見を唱え続ける。今日まで、意見に異

⁴⁶ Cüneyt Ülsever, “İmam hatipliler ve Erbakan,” *Hürriyet* (2004 年 6 月 21 日) <http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=235180> (2007 年 12 月 26 日閲覧)

を唱える人もいない。しかし…

この問題で、私と議論する人々が持っている、彼らの根底にある恐怖を、私は取り除けなかった。ネジュメッティン・エルバカンは、イマーム・ハティプ高校の学生のことを「彼らは私達の後を継ぐ者たちである。」と言わなかつただろうか。

イマーム・ハティプ高校の卒業生の全員が、エルバカンに傾倒していないこと、さらには、段々とエルバカン離れしていることや、「イマーム弁護士」や「イマーム官僚」などはとても数が減っていることは、ほとんど誰もが受け入れる。しかし、エルバカンが刷り込んだ「潜在的な恐怖」からは誰も救われない。「彼らは私たちの後を継ぐ者たちである。」という言葉は、トルコの様々な場所で、福祉党支持者以外の様々な意見、信仰をもつ、様々な種類の人々の間で、共通の恐怖のコーラスとして響いている。

このように、Cüneyt Ülsever は、8年間の義務教育期間延長によって職業高校は、国の根幹をなす労働者のエキスパートを育成することができない状態になってしまったことを嘆いており、この8年間の義務教育延長を否定的にとらえている。また係数の制度自体も必要はないものだとしている。この理由としては、大学入試は普通高校向けに作られているので職業高校にはすでに不利だと述べている。イマーム・ハティプ高校については、職業高校ではなく、宗教的に特化した教育の要求にこたえる組織だと位置づけている。ただし、世俗主義を擁護する人たちのイスラム復興勢力に対する恐怖感というものも理解している。このように彼は、2月28日以前のような職業高校の必要性を第一に訴えている。そして、世俗主義の枠組みの中でイマーム・ハティプ高校を普通高校という立場で認めようという姿勢が見られる。

これに対して、Yeni Şafak紙のコラムを取り上げてみたい。2004年5月16日のAhmet Taşgetirenは「敵意 (Düşmanlık)」というコラムで、以下のように述べている。⁴⁷

イマーム・ハティプ学校に対するアプローチは残念なことに「敵意」として特

⁴⁷ Ahmet Taşgetiren, “Düşmanlık,” Yeni Şafak (2004年5月6日)
<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/06/atasgetiren.html> (2007年12月26日閲覧)

徴付ける以外にないと私は感じている。そしてこれは単に「イマーム・ハティプへの敵意」ではなく、「線の敵意 (çizgi düşmanlığı)」である。イマーム・ハティプ学校は、「その線」が具現化した状態に見えるので敵意の対象になっている。その線は、「保守層」から「イスラムに敏感」になることにまで伸びていて、一般的には、トルコの人々の大部分の平均を示す線である。その線は、ほぼ全ての右派政党に平行であり、トルコの一部はその線に対して責任をおっている。また、どの政党が勢力をつけようが大部分の意思と民主主義に責任がある。知識の少ない人に対して反対の考えを教えて変えさせることは可能である。しかし、「敵意」は教えても変える事ができない。

(中略)

しかし、これらは国に平和をもたらさない。政治で度々「2月28日過程」シンδροームが続いている。「イマーム・ハティプ学校の生徒はみな溺れろ。」「受け入れろ。」「自分の身に降りかかってきたことを受け止めろ。それができないならなくなれ。」と言うことを社会的な平和を探求することと言うのは不可能である。

さらに、係数のシステムに関しては4点を指摘している。

- 1) 係数のシステム自体に問題がある。昨年、ÖSSで同じ生徒が理系、文系でトルコ1位になった。この生徒が高校時代のコースによって係数を適用した結果、高校時代のコースが理系なら文系で、文系なら理系で、とても下位の得点の学生と同じ運命をたどる。つまり、科学高校 (Fen lisesi)、アナトリア高校と普通高校の1位の生徒も係数の犠牲になることを防ぐことはできない。
- 2) 高校時代のコースによる係数の違いを (0.8~0.3) から (0.80~0.60~0.45) に減らして、分野の変更をしやすい状態にする。しかし1点でさえも大きく順位が変動する受験において、この適用でも痛みは取り除けない。
- 3) 職業高校は、普通高校と試験の結果の評価においては平等である。しかし、どの職業高校がどの分野 (理系、文系、文理系) に属するかを国民教育省の国民教育委員会が明らかにする。これは議論を呼び起こす可能性がある。イマーム・ハティプ高校はどのグループに属するのかという質問の答えは気になる問題で

ある。あるいは、「文系に属していると決定されるのか」、さらには「高等教育審議会は文系の得点によって学生を取る学部を制限したら」という不安がある。過去の制度では、イマーム・ハティプ高校の学生も普通高校の生徒のように2年生から分野の選択をすることができた。このシステムをもう一度復活させることはできる。

4) イマーム・ハティプ高校が「職業高校」とみなされることは深刻な危険をはらんでいる。これは、2月28日体制が望んだことである。しかし、首相と国民教育相が共有している「保護者たちは、子供たちをこの学校に宗教家にするためだけに送っているわけではない。」という形での正しい認識とそぐわない。公正発展党政権によって行なわれたので強調されてきたこの定義づけは、将来悪意のある人の手にとっても否定的な凶器を与えてしまうかもしれないという不安を無視してはいけない。

Ahmet Taşgetiren の主張は、以上のようなものである。彼は、まずこの高等教育審議会の改革案に対する大統領を始めとする世俗派のアプローチに対して、イスラム派に対する敵意であると述べている。これはイマーム・ハティプ学校に対する敵意ではなく、もっと大きなイスラムを少しでも支持する人々に対する敵意とし、さらに世俗派は大衆に巧みに敵意を吹き込んでいると主張している。係数問題に関しては、係数システムの排除を求めると同時に、イマーム・ハティプ高校の現状から職業高校と定義するのは正しくないということ、さらに、イマーム・ハティプ高校を文系、理系、文理系という形で括ることも、高等教育審議会によるさらなる制限を引き起こす原因となるのではないかと危惧している。

また、Mustafa Karaaliogluは、「高等教育審議会改革法案は何をもたらすのか。(YÖK tasarısı ne getirecekti, ne getiriyor?)」において以下のように述べている。⁴⁸

まず、最も重要な問題である大学入試の係数適用について分析しよう。政府の

⁴⁸ 前述したように、この法案は大統領セゼルによって差し戻され可決されなかった。また、議会を通過した法案とは文理系の係数の適用について異なっている。

Mustafa Karaalioglu, “YÖK tasarısı ne getirecekti, ne getiriyor?,” Yeni Şafak (2004年5月5日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/05/mkaraalioglu.html> (2007年12月26日閲覧)

意図は、係数を平等化し文系、理系、文理系の得点によって希望する学部に係数の影響がなく進学できることを保証することである。法案によると大学進学で中等教育の内申点の計算は次のようになる。法案が法制化されると、学生の内申点は100点満点で、内申点の種類によって異なった係数を掛けた結果で決まる。文系として決められた高校卒業の学生は、文系の学部を選ぶならば、内申点に0.8を掛けて、文理系ならば0.6を掛けて、理系を選んだなら0.45を掛ける。文理系の高校の卒業生は文理系を選ぶと内申点に0.8を掛けて、理系と文系を選択した場合は0.6を掛ける。これによると、出身高校でのコースに準じて学部を選択した場合、問題がない。内申点に0.8を掛ける。問題は他の分野を選択した場合に起こる。例えば、文系コースの学生が、文理系の配点の学部、例えば法学部や政治系の学部を選択した場合内申点に0.6を掛ける。もっと具体的に言うならば、現在文系として認められていて、今後も文系であり続けるはずの職業高校（イマーム・ハティブ高校）は、内申点が80点の卒業生の内申点は $80 \times 0.6 = 48$ 点になる。文理系の普通高校の内申点が80点の卒業生の場合、 $80 \times 0.8 = 64$ 点になる。二人の得点の差は16点で現在のシステムの9問から10問の差となる。法学部のように競争率の高い学部では、学生が80問から85問の問題を解かなければならないという状況を加味すると、文系コースを卒業した学生は、文理系の普通高校出身の学生を抜くためには問題をすべて解かなければならない。この状態でさえ競争することはできないかもしれない。

しかし、新法案は高校のコースを明らかにする役割を国民教育省に与えている。これは、省に職業高校を文系、理系、文理系に割り振ることができる権限を保証している。よって、職業高校の中で文系、理系、文理系を割り振られたら、この学校の卒業生は大学入試で遭っていた不平等を補うことができる。しかし、システムがこのように変わろうとも、例えば、ある職業高校の文理系コース出身の学生が文系の学部を選択した場合、具体的には、イマーム・ハティブの文理系コースの卒業生が神学部を選択した場合、内申点に0.6を掛けると、これはまた別の不公正を生み出す。結論としては、係数問題が解決されたかどうかは、この問題に関する今後の制度の変化と法律の適用を見る必要がある。

Mustafa Karaalioglu は、新たに今回法案で提起されたシステムにおいても問題点が出

ていることを主張している。この問題点の一つ目は、現在のシステムと同様に自分の専攻分野から他の専攻分野を大学入試で選択した場合に起こる不平等についてである。二つ目は、本文のイマーム・ハティプ高校卒業生の例のように、イマーム・ハティプ高校の文理系コースに在籍の生徒は神学部への進学が不利になる。このように係数問題の真の解決には未だ至っておらず、今後を見守っていくべきだとしている。

また、2004年の5月14日のFehmi Kuruの「何があっても喧嘩が起こる (İlla kavga çıkacak)」というコラムでは、以下のように述べられている。⁴⁹

高等教育審議会の改革法案において、政府がしたかった変更によっても、トルコの高等教育に存在している慢性的な欠陥を明らかにできなかった。議長が憲法の教授である高等教育審議会は、人口の大部分を若者が占めているトルコにおいてはほとんどの人が注目している機関である。しかし、政治家を排除してまで、高等教育審議会は地位を守ろうとした。係数という問題だけでなく、経営、財政、そして何よりも大事な学問の自治を保証する方法を選択しなかった。高等教育審議会は、係数論争に勝利することを、高等教育審議会とその管轄下の大学のシステムを時代に合わせた状態にすることよりもっと重要だと考えた。しかし、ある調査の結果によると、小学校から大学まで全ての教育の段階にいる学生たちが、自分たちに提供されたサービスに満足していない。内容が不必要であること、試験のシステムが間違っていること、学校と生活の間の矛盾がこの不幸の下にはある。100人の学生のうち92人は、「このシステムが私を不幸にしている。」と述べている。一方、この批判の矛先である高等教育審議会は、自分の間違いを訂正する代わりに、合計数千人の学生の大学入学を妨害するためにマジノラインを作る特技を知っている。⁵⁰

この問題で、教育システムにおける欠陥が議論されたのを聞いたことがあるか。「学生たちは不幸である。」という結論にいたった調査グループのリーダーさえ、目の前の結果が示している悲劇をなくすことを提案し続ける一方、「係数システ

⁴⁹ Fehmi Kuru, “İlla kavga çıkacak.,” Yeni Şafak (2004年5月14日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/14/fkoru.html> (2007年12月26日閲覧)

⁵⁰ マジノラインとは、第一次大戦でドイツに侵攻されたフランスが自国をドイツから守るために作った要塞。

ムによってますますこの不幸を増やさないようにしよう。」と述べている。あたかもこれが可能であるかのように…トルコは、20年を超える期間、高等教育審議会のシステムの奴隷であった。この奴隷制度がもたらした慢性的な問題を鋭い刀によって切ってもらうことを望み続けている。EUの加盟国になる過程で、わが国が未来に向けて幸福な人々を育てられるためには、教育システムのAからZまで変えることが条件である。係数問題について出始めた騒動が何も示さないなら、現在の高等教育審議会のシステムとリーダーたちの資質はそこまでである。

以上のように Fehmi Koru は、高等教育審議会に対する批判を述べている。特に、トルコの教育が高等教育審議会の奴隷のような存在になっており、それがトルコの教育における慢性的な欠陥をもたらしていることを主張している。トルコの教育に関して抜本的な改革を求めている。批判のあがっている係数問題への高等審議会の今後の対応が、彼らの試金石であると主張している。

ここでこれらの記事について検証してみたい。

まず始めに、係数問題についての彼らの考え方を整理したい。まず、İlter Türkmen は、係数の導入はイマーム・ハティプ学校だけではなくて他の職業学校にも大きな影響を及ぼしたことを忘れてはいけないと述べている。また、コラムでトルコにおける職業高校の卒業生の数が少ないということについても述べている。以上から、職業高校に対する障害になるとして係数のシステムに対して否定的であるといえる。係数の見方に関しては、Cüneyt Ülsever も同様の見解を示している。さらに彼は、係数を職業高校の卒業生に対しても適用することは不合理だと述べている。

次に、Mustafa Karaalioğlu は、コラムにおいて係数の変更点を中心に話しているが現在の制度さらに改革案のやり方に関しては問題点が多いとしている。ただし、彼は解決が待たれると述べていることから、いい解決策があるならば係数システム自体を否定していないのかもしれない。

しかし、Ahmet Taşgetiren と Fehmi Koru は、明確に係数のシステムを否定している。特に Ahmet Taşgetiren は、係数システムの評価において、システム自体が問題であるとはっきり主張している。一方、Fehmi Koru は、係数のシステムによって教育制度を良くすることはできないという言葉で係数システムを否定している。

このように、6人全てのコラムニストが係数のシステムに関して部分的であれ、否定的

に見ている。しかし一人一人の考え方はかなり異なっている。

次に、係数システムについて議論される時に出てくるイマーム・ハティプ高校が、職業学校なのかという点である。この点に関してもそれぞれの見方を整理したい。

まず、İlter Türkmen は、イマーム・ハティプの校数と学生数の増加について触れている。そして、現在の卒業生の数は宗教職の需要をはるかに越えるものであること、さらに、宗教職につくことのできない女性が在学していることから、職業学校としての性格を失っていると指摘している。この状況に彼は、人数を制限するべきで、職業学校として留めるべきだと主張している。

Cüneyt Ülsever も İlter Türkmen と同じようにイマーム・ハティプ高校の現状を分析している。しかし、彼はイマーム・ハティプ高校の立場について別のコラムで以下のように述べている。⁵¹

わが国で需要よりもかなり多くイマームがいるのに、イマーム・ハティプ学校に対しての必要が感じられていることを以前に述べた。

イマーム・ハティプ学校は、わが国のイマームの需要に対してではなく、国の一部の人の宗教に特化した教育の要求に対する答えである。

さあイマーム・ハティプ学校を宗教学校の状態にしよう。

このような意見からもわかるように、彼はイマーム・ハティプ学校をイマーム養成学校としてではなく、宗教に特化した学校という立場にするべきだと述べている。

また、Ahmet Taşgetiren もイマーム・ハティプ高校の現状に関しては、同様な分析をしている。そして、Cüneyt Ülsever のようにイマーム・ハティプ学校は職業学校ではなく宗教学校と見るべきだと考えている。しかし、この考えは公正発展党が強調している意見なので、世俗派の反発も警戒して慎重な立場をとっていることが特徴的である。

このように見ても、それぞれの考え方の立場が様々であることが読み取れる。İlter Türkmen は、イマーム・ハティプ高校に関しては職業高校のままであるべきだということやイマーム・ハティプ高校の学生数が急増したことに関して残念なことだという言葉からもかなり世俗主義を擁護する立場だろうと考えられる。

⁵¹ Cüneyt Ülsever, “Meslek liseleri yok oluyor!,” Hürriyet (2004年5月10日), <http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=224336> (2008年1月4日閲覧)

同じ新聞紙でコラムを連載している Cüneyt Ülsever は、かなり違った立場である。イマーム・ハティプ高校の現状と宗教学校としてのイマーム・ハティプを認めている。一方、二つ目のコラムでは世俗主義を擁護する人々の感情についても考察しそれにも理解をしめしている。そういった意味で、多様な価値を認める立場であるといえる。

Ahmet Taşgetiren は、これまでの世俗派によるイスラム派の押さえ込みに関して敵意という言葉を用いかなり厳しい批判を繰り返している。その一方で、その敵意から来るイスラム派への更なる抑え込みを警戒するという立場である。

このように、たくさんの方が様々な立場でこの問題をとらえているのである。この議論がこの法案差し戻しの後、どのように発展したのかを次節では取り上げる。

第5節 イマーム・ハティプ高校の現在

この高等教育審議会の改革案における係数の撤廃はセゼル大統領の法案差し戻しによって成立しなかった。この後、係数問題は怎么样了のかをこの節では取り上げる。

政府は、2005年12月14日の官報で「国民教育省通信制高校法令」を「中等教育を中退または卒業した者と高等教育を中退または卒業した者は、通信制高校に編入する可能性を有する」という項目に変更した。⁵²これは、イマーム・ハティプ高校の生徒が通信制の高校に編入し、普通高校の卒業資格を得られるようにするための措置である。こうすることによって、イマーム・ハティプ高校の卒業生も普通高校の卒業生扱いで受験でき、係数の適用において制限が少なくなるのである。

これに対して、高等教育審議会は「高等教育審議会が干渉され、世俗主義の理念に反する。」という理由により、通信制高校法令の一部停止と指し止めを求めて裁判を起こした。

53

この裁判で最高裁は、「初等教育を終えたが中等教育を続けなかったものは通信制高校に登録することができる。」という項目に関しては、高等教育審議会の求めた停止を退けた。これまでの判例にあわせて、高校の準備学年で留年した生徒と高校1年で留年した生徒は、通信制高校に編入することができることとした。このようにして、中等教育で失敗した生

⁵² “İmam hatipliye Açıköğretim yoluyla ÖSS hakkı durduruldu.,” Hürriyet (2006年2月8日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspex?id=3905109> (2008年1月2日閲覧) より引用。

⁵³ “YÖK, ‘çifte diploma’ için iptal davası açtı.,” Hürriyet (2005年12月27日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspex?id=3705444> (2008年1月2日閲覧)

徒、選択を誤った生徒にはもう一度教育を受けられる権利を一部保障した。

しかし「中等教育を中退または卒業した者と高等教育を中退または卒業した者には、別の分野においても教育の機会を与えるために通信制高校に登録できる。」という項目に関しては、施行の停止が決定された。⁵⁴（ここでの中退は、高校2年以上での中退を意味する。）

こうして、一方では学校で失敗した学生を助けるという措置を取りながらも、他方では、イマーム・ハティプ高校の生徒が通信制高校に編入して普通高校卒業生扱いとなって大学受験を受けるという方法は取ることを阻止する判決が下った。

次に係数の議論がされたのは、第17次教育評議会である。この評議会で「係数の適用を排除して、全ての学生が希望する分野の大学に進学する権利を与えること」という議題についての投票が行われ、66対4の賛成多数で承認された。⁵⁵これに対して学長会議（Rektörler Komitesi）と高等教育審議会は会議を開き以下のような決議を発表した。⁵⁶

- 1) 職業教育と普通教育は、目的、問題、物理的な下部構造が違う二つの教育分野である。職業教育は、実用に向けて特別な知識と巧さを身につけることを目標にしている一方、普通高校の目的は、大学への準備である。さらに、特定の職業高校と教員養成高校の継続という点での教育学部、神学部、職業技術系の学部に学生を進学させるためにこれらの高校の卒業生にも特別なアドヴァンテージを保障するための係数の適用は存在している。
- 2) 会議の決定は、知られているように、適用の義務がなく渴望という性格を持った決定である。次のことも訴えたい。このような渴望の決定によって生まれるだろう深刻な結果の一つは、職業高校の生徒の大学進学への期待によって、職業教育が中断してしまうという危険である。

このように、教育評議会での決定を高等教育審議会は受け入れず、大学入試でも変更を行

⁵⁴ “İmam hatipliye Açıköğretim yoluyla ÖSS hakkı durduruldu.” Hürriyet (2006年2月8日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspex?id=3905109> (2008年1月2日閲覧)

⁵⁵ “Şura İHL'ye çalıştı.” Hürriyet (2006年11月15日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspex?id=5439060> (2008年1月2日閲覧)

⁵⁶ “Rektörler Komitesi :İHL'ye katsayının kalkınmasına karşıyız.” Hürriyet (2006年11月21日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspex?id=5478336> (2008年1月2日閲覧)

わないことを明らかにした。

以上のように、係数の議論は依然として続いたままであり、2008年1月の段階では公正発展党の新提案は実施にはいたっていない。

終わりに

ここまで、1970年代から2004年までのイマーム・ハティブ学校について、その歴史を取り上げ、政治の中でのイマーム・ハティブ学校の存在について見てきた。

1970年代は、イマーム・ハティブ高校が職業高校になり、さらに高等イスラム研究所以外にも大学の神学部に限りに進学することが認められた。また、政治の面ではエルバカン率いる国民救済党が連立政権を組んだ。この影響により、イマーム・ハティブ学校の数も増加した。こうしたイスラム復興勢力の盛り上がりのなかで、イマーム・ハティブ高校の生徒と、国民救済党の下部組織の「急襲者」やヌルジュやナクシベンディーといった教団とのつながりも見えるようになった。この時期は、イマーム・ハティブ学校と政治におけるつながりの土台が作られた時期である。

1980年代には大きな出来事があった。それは、イマーム・ハティブ高校から大学のどの学部にも進学できるようになったことである。さらに、民政移管後のオザルによる経済の自由化でイスラム復興勢力の経済力が向上した。これにより、子供にイスラム的な価値観を身につけさせ、近代的な教育を受けさせると同時に子供の大学進学を考える保護者は、子供をイマーム・ハティブ学校に送るようになった。この状況のなかで次代のイスラム復興勢力を担うエリートたちを輩出する場としてイマーム・ハティブ高校は位置づけられた。

1990年代になると、学校数は増え続け1995年には500校を超え、生徒数は1990 - 1991年の教育年度には10万人を超えた。こうして1980年代以降、イマーム・ハティブ学校で教育を受け神学部以外の学部に進学したエリートたちが次々に出始め、政治的にも影響力を持ってくるようになり始めた。この時期に政治においては、国民救済党の後継政党である福祉党は1996年には正道党と連立政権を組むまで勢力を伸ばした。イマーム・ハティブ学校の増加と卒業生の表舞台での活躍と福祉党の発展により、イスラム復興運動は、ピークを迎えた。

このように、イマーム・ハティブ学校と政治の関係を見ていくと、導師と説教師を養成する職業学校として開校したイマーム・ハティブ学校が、1970年代のエルバカンの登場とともに少しずつ政治との距離が縮めてきたといえる。1980年以降は着実に校数を増やしイスラム復興勢力の象徴となった。

一方、世俗派はイスラム派の台頭が見られると、常に抑え込むという形で対応してきた。特に政党に関しては、国民秩序党から始まり福祉党、美德党に至るまで、イスラム政党は

常に世俗派の圧力により解党させられてきた。しかし、イマーム・ハティプ学校に関しては、一部中等部の閉鎖などはあったが、常にその校数を増やしていた。イマーム・ハティプ学校に対する近年の最も大きな抑え込みは、中等部の閉鎖と大学入試の係数の導入であったと考えられる。つまり、現在のイマーム・ハティプ学校の状態である。この時点でイマーム・ハティプ学校は、Ahmet Taşgetiren のコラムにあったように、イスラム派の台頭を具体化する存在となっていたのである。

そうした抑え込みにもかかわらず、2002年の総選挙以降、福祉党の後継政党であり、イスラム派の公正発展党が政権に就いている。公正発展党が政権についている以上、イマーム・ハティプ学校の抑え込まれている原因となっている係数のシステムを巡り、政府を中心とするイスラム保守派と高等教育審議会を中心とする世俗派の更なる議論が続くであろう。特にこの議論に関しては、本論で取り上げたように İlter Türkmen のような世俗主義を擁護する人々と Ahmet Taşgetiren や Fehmi Kuru のようにイスラムを支持する人々の間での論争が続くと思われる。この議論が、世俗派か、あるいはイスラム保守派の思惑通りになるのかそれとも、Cüneyt Ülsever の求めるように、両者が認め合う結果に終るのか今後も注意深く見ていく必要があると思われる。

ただし、2007年の6月の大統領選挙では公正発展党からギュルが選出され、さらに2007年の12月には高等教育審議会の理事長にズィヤ・ユスフ・オズジャンが任命された。⁵⁷そして、政府は2008年の教育プログラムを発表し、その中でも係数の廃止を公約として掲げている。⁵⁸恐らく2008年、係数の議論は大きな展開をみることだろう。この議論が民主的な終結したときに、トルコにおいて、イスラム保守派と世俗派の共存、あるいは、世俗主義の新たな形が見えるのかもしれない。

⁵⁷ “YÖK’e süpriz atama: Prof. Dr. Yusuf Ziya Özcan.,” *Milliyet* (2007年12月10日) <http://www.milliyet.com.tr/2007/12/10/son/sonsiy18.asp?prm=0,7857891> (2007年12月11日閲覧)

⁵⁸ “İmam hatiplilere yol açıldı.,” *Hürriyet* (2007年12月31日) <http://www.hurriyet.com.tr/egitim/anasayfa/7580038.asp?gid> (2008年1月2日閲覧)

参考文献

新井政美『トルコ近現代史』みすず書房、2001年

澤江史子『現代トルコの民主政治とイスラーム』ナカニシヤ出版、2005年

新妻幸恵「トルコ共和国におけるイマーム・ハティプ学校の歴史と現状」東京外国語大学
外国語学部トルコ語専攻 2002年度卒業論文

間寧「トルコの民主化・宗教自由化とイスラーム運動の発展」『イスラーム地域の民衆運動
と民主化』イスラーム地域研究叢書 3、東京大学出版会、2004年

宮崎元裕「トルコの大学入試における高大接続 - 高校教育の多様性を考慮した画一的な大
学入試 - 」『比較教育学研究 31』東信堂、2005年

Mehmet Ali Gökaçtı, *Türkiye’de Din Eğitimi ve İmam Hatipler*. İletişim Yayıncılık
A.Ş İstanbul. 2005

İlter Türkmen, “Türkiye’de eğitim açmazı,” *Hürriyet* (2004年5月22日)

<http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=227487> (2007年12月26日閲覧)

Cüneyt Ülsever, “Türkiye geleceğini ıskalıyor,” *Hürriyet* (2004年6月3日)

<http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=230665> (2007年12月26日閲覧)

Cüneyt Ülsever, “İmam hatipliler ve Erbakan,” *Hürriyet* (2004年6月21日)

<http://arama.hurriyet.com.tr/arsivnews.aspx?id=235180> (2007年12月26日閲覧)

Ahmet Taşgetiren, “Düşmanlık,” *Yeni Şafak* (2004年5月6日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/06/atasgetiren.html> (2007年12月26
日閲覧)

Mustafa Karaalioglu, “YÖK tasarısı ne getirecekti, ne getiriyor?,” *Yeni Şafak* (2004年5
月5日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/05/mkaraalioglu.html> (2007年12月26
日閲覧)

Fehmi Kuru, “İlla kavga çıkacak.,” *Yeni Şafak* (2004年5月14日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/14/fkoru.html> (2007年12月26日閲覧)

Cüneyt Ülsever, “Meslek liseleri yok oluyor!,” *Hürriyet* (2004年5月10日),

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=224336> (2008年1月4日閲覧)

“İmam hatipliye Açıköğretim yoluyla ÖSS hakkı durduruldu.,” *Hürriyet* (2006年2月
8日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=3905109> (2008年1月2日閲覧) より引用。

“YÖK, ‘çifte diploma’ için iptal davası açtı.,” *Hürriyet* (2005年12月27日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=3705444> (2008年1月2日閲覧)

“Şura İHL’ye çalıştı.,” *Hürriyet* (2006年11月15日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=5439060> (2008年1月2日閲覧)

“Rektörler Komitesi :İHL’ye katsayının kalkınmasına karşıyız.,” *Hürriyet* (2006年11
月21日)

<http://arama.com.tr/arsivnews.aspx?id=5478336> (2008年1月2日閲覧)

“YÖK’e sürpriz atama: Prof. Dr. Yusuf Ziya Özcan,” Milliyet (2007年12月10日)

<http://www.milliyet.com.tr/2007/12/10/son/sonsiy18.asp?prm=0,7857891> (2007年12月11日閲覧)

“İmam hatiplilere yol açıldı.,” Hürriyet (2007年12月31日)

<http://www.hurriyet.com.tr/egitim/anasayfa/7580038.asp?gid> (2008年1月2日閲覧)

“Katsayıda eşitlik çıktı.,” Yeni Şafak (2004年5月13日)

<http://www.yenisafak.com.tr/arsiv/2004/mayis/13/p01.html> (2008年1月7日閲覧)